

## Y05c 尾鷲市天文科学館と三重大学の連携

伊藤 信成 (三重大学), 上野寛人, 湯浅祥司 (尾鷲市天文科学館), 尾鷲市教育委員会

理科の教員養成をめぐることは、理科を苦手とする小学校教員の割合が高くなっていることや、中学校でも地学分野を苦手とする理科教員の割合が高いことが指摘されている。三重大学教育学部でも、この状況を受け、実験・体験学習を教員養成カリキュラムにとりこんでいるが、大学周辺の都市光による光害や現有機器の状況等の関係で、十分な実習が難しい状況になってきている。この状況を改善するとともに、三重県南部東紀州地域との連携を強化するため、三重大学教育学部では2010年12月に尾鷲市と連携協力協定を締結し、尾鷲市立天文科学館を中心とした連携活動に取り組んでいる。

尾鷲市は、熊野市とならんで三重県南部東紀州地域の中核市であり、名古屋や大阪と言った大都市圏から離れているため、夜空が暗く星がきれいな地域として知られている。尾鷲市天文科学館はふるさと創生事業として、市民のアイデアをもとに建設された公共天文台である。1990年の開館以来、“お母さんが子ども達の手を引いて通える天文台”として親しまれている。そのキャッチフレーズの通り、天文台は市役所に隣接する近隣の児童生徒が徒歩で通える天文台となっている。この天文台には、東海地域では最大クラスとなる口径81cmの反射望遠鏡が設置されており、毎週末の観望会に供されている。

三重大学では協定締結後、学生の観測実習や卒論のデータ取得の場として尾鷲天文台を利用するとともに、地元の児童・生徒に対して体験授業や観測会を行っている。発表では、三重大学と尾鷲市天文科学館のこれまでの活動を紹介するとともに、今後の取り組みと課題を議論する。